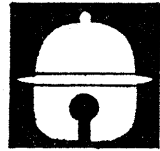


転任



小坂田 玲子

で自分の思う方向に早くしていきたいという「焦り」があったように思う。担任との間には溝ができ、私はあれやこれやと苦しみ、動けなくなってしまう。そんな時、「どんな保育でも、その保育で何をしようとしているのかをみ、それを認めてゆくことからまずは出発しなければいけない」という話を聞き、私は自分では既に十分知っているつもりだったが、知らず知らずのうちに大きな落とし穴に落ち込んでいた自分に気づいた。

私のかねてからの念願であった「子供が自分の遊びを追求していく保育」がようやく園をあげて実現し始め、これからという時に転勤となった。新しい環境では、「一斉保育」がその大半を占めていた。そして何よりも強く私の心を痛めたのは、そこにいた子供たちであった。顔色は蒼白で笑いがない。何かしら心が荒んでいるように思えてならなかった。進級して保育室が隣りに移ったことによる一時的なこと、簡単に言ってしまうえない、もっと別の何かがあるように私には感じられた。その一因が、「一斉保育」にあるのではないかとも

思え、私はこの辺のことを担任とじっくり話し合いたいと思った。

しかし現実にはうまく話し合えなかった。新しい環境の中

いきなり流れを変えようとしたり、流れに逆らっても決してうまくいかない。まずはその人々のやり方を認め、あるいはその園や周囲に漂う風土を認めることから出発すべきだ。そして私は私なりの見方、考え方で子供と交わり、その私の実践を通して担任と話し合うことから始めてみようと思ったのである。

そんなある時、男児数名がMを苛めているのを見た。通りすがりにぶつていく子もいる。「臭い！ Mは臭い！」と吹聴したり、女児の中にも足げりしている子がいる。Mはというと、やられるままにじっと耐えていた。それ以来こういう場面に幾度か出会った。Mは自閉的傾向があるということなので、区の教育相談を受けていたが途中で止めてそのままに

っていた。Mは泣くことも、笑うことも、怒ることもできない、子供らしい本性の失われてしまったような生命力の微弱的な子供のようであった。私はMとできる限り交わり一緒に遊んだ。Mはいつの間にか私に話しかけてくるようになった。

ある日、MがSに苛められていた。Sは容赦なく蹴飛ばしておもしろがっていた。他の子もつられて「エイ！」とかけ声をかけて蹴飛ばしていた。Mは止めてほしいと言わぬばかりに手で顔を覆うようにして避けようと腕^{かか}んでいる。しかし何も言わない。私は「M君が痛いと言っているよ、嫌だから止めてほしいと言ってるよ」と声をかけた。と急にMがワッと泣き出した。周りの子供が吃驚する。「オイオイMが泣いたぞ！ 始めて泣いたぞ！」と囁きたてる。

Mはオルガンと壁の小さな空間に踞り「スッキリした。ああスッキリした」と言って泣き続ける。長い間抑圧されていたものが堰を切って流れ出した感じであった。するとまた他の子等が「ああスッキリしただって」と笑う。と急にまるで人が変わったように笑った子等に怒り向っていった。周りの子等が驚いて立ち竦んだ。

その翌々日Mは始めて笑った。声を出して可愛い顔をして笑った。Mの感情はこうして甦ってきた。ある時Mは、「む

ちゃくちゃ」が好きと言った私に「何故か？」と聞いてきた。私は「むちゃくちゃの後にはむちゃくちゃでないものが生れるから」と応えた。それからMは黙々とむちゃくちゃをやり、遊び始めた。こうしてMはM自身の足でしっかりと歩き始めたのである。そして私のはあのMの黒ずんだ皮膚からは想像もつかぬような美しい紅の唇をみた。友だちとも対等に遊ぶ姿がみえるようになってきた。

担任はこのようなMをみて、この頃Mが変わってきた、母親も変わってきた、ニコニコと挨拶するし、何か言ってもすんなりと受け入れてくれる、Mの弟まで変わった、Mの家、家の中で変ったみたい、どうして急に変わったのだろう、と不思議そうに話しかけてきた。担任のMに接する態度も以前とはすっかり変った。と同時に私の話も受け入れてもらえるようになってきた。保育後、子供たちのことを話し合っていくなかにも次第に和やかな雰囲気が漂うようになってきた。そして今では「一斉保育」よりも「子供が自分の遊びを追求していく保育」が大半をしめるようになってきた。新しい環境に移った私も、ようやく一年を終えた。

(東京・駕籠町幼稚園)